

ザンビア産竹製自転車を入力 地元ソーシャルベンチャー支援に

クルマの普及が進んでおらず、鉄道やバスといった公共交通機関も十分整備されていない途上国では、自転車が日常的な足として利用されていることが多い。ただ、その自転車も、決して安くはない価格で、インド製などの低品質な海外製しか手に入らないことが少なくないようだ。

地元住民を雇用

そんな中、アフリカ南部の内陸国ザンビアで、地元企業家と米国人らによって設立された自転車メーカー、ザンバイクス・カンパニー（本社・ルサカ）は、同国内で圧倒的に不足する自転車の生産・販売に取り組んでいる。失業率が50%を超え、人口の6割以上にあたる約700万人が1日当たり1.25ドル以下で暮らすとされる同国民の多くにとって、自転車はまだ高嶺の花。しかし、公共交通機関が未整備の同国では、仕事や通学をはじめ、買い

物や水を汲むため出掛けたり、医師が往診に回ったりする際など、普段生活するうえで自転車が欠かせない。

自転車は、まさに「生きるための移動・運搬の手段」として位置付けられているのだ。

ザンバイクス・カンパニーは、地元の住民を雇用して、生活に欠かせない自転車を作り出すことを目的とした、住民の住民による住民のための「ソーシャルベンチャー」だ。未舗装の道ばこ道にも負けない頑丈なオフロード用自転車や、水や農作物など大きな荷物を運べるカーゴ付き自転車、さらに、病人や妊娠婦らを病院へ安全に搬送できる救急自転車「ザンビュランス」など、同国の事情や国民のニーズに合わせた自転車を作っている。

例えば、2007年の設立後、昨年までの5年間で延べ100人以上の雇用を生み、救急自転車1,000台以上を含む自転車1万台以上を生産。すでに多くの人たちの生活を助けている。その黄色い印象的なデザインは、同国民の間にも膾炙し、「黄色い自転車のザンバイクス」として親しまれているという。

そんな同社が経営安定化を目指して主に輸出向けに開発したザンビア産の竹を用いた自転車フレームを扱っているのが、輸入卸業の（株）アライアンス・ファクトリー（東京都渋谷区）だ。代表取締役の山本徹也氏は「日本国内向けに輸入・販売することで、ザンバイクス・カンパニーの取り組みを間接的に応援したいと考えました。竹製フレームの売り上げが増えれば、同

株式会社アライアンス・ファクトリー



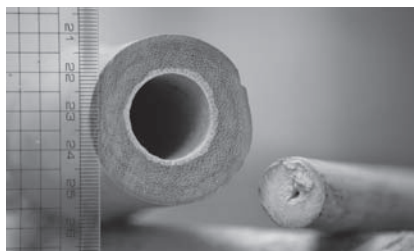
代表取締役社長 山本 徹也氏

社が海外から稼いでくる外貨も増え、同社の設備増強やさらなる雇用創出につながります」と強調する。

日本と異なる超肉厚な竹

山本社長がこの製品と出会ったのは、ある展示会がきっかけだ。「まずは実際に乗ってみようと、1台仕入れてみました。乗ってみると、思った以上にしっかりと力を逃さずスポーティーな走りができますし、乗り心地も抜群。単なる企画商品ではなく、継続的な定番商品として、一般のスポーツバイク市場で十分流通できるのではないかと考えて、本格的に取り扱うことに決めたのです」（山本社長）。

同社は、もともとイタリア製オーガニックハーブを日本向けコスメ商品として販売する事業など、欧州企業の日本進出を支援する事業で創業。そうした事業を展開するうち、中国製や台湾製の製品などに押されて伝統のあるイタリア国内の自転車職人が衰退の危機にあることを知り、職人が丹精込めて手作りした、イタリア製のこだわりの



ZAMBIKESバンパーバイク完成車(上)。フレームに使うザンビア産の竹は超肉厚

高級自転車を輸入・販売する事業にも乗り出した。

山本社長は「もともと自転車好きで、いつかは自転車に関係する事業を手掛けたいと考えていました。日本では『ママチャリ』と呼ばれる比較的安価な自転車が主流で、使い捨てのような感覚で乗られています。しかし、そうではなく、自転車をもっと大事にするようなカルチャーやスタイルを提案したいと考えています」と語る。

そんな山本氏が出会ったのがザンビアの竹製自転車フレームだ。ただし、竹とは言っても、日本に生えているような竹を想像するのは間違い。ザンビア産の竹は極めて肉厚で、中心に空いている空洞も非常に細い。一方で、軽くて丈夫で、耐久性にも優れている。しかも、自転車フレームとして使うと、独特の適度な“しなり”や高い衝撃吸収性と振動減衰性が、でこぼこの多い路面や長距離走行による疲労の蓄積を抑えて、より快適な乗り心地につながるという。山本社長は「見た目のインパクトが大きいですし、超肉厚の竹による剛性感と自然なしなりのバランスが絶妙です。街乗りも快適ですが、100キロ超のような長距離ライドでその本領を発揮します」と強調する。

製造に多くの手間と労力

製造にあたっては、まず、ザンビア国内で3年程度生育した竹を、防虫や乾燥促進、割れ防止などのための処理を施したうえで、専用ボックスに入れて3カ月～半年程度を掛けて乾燥させる。十分乾燥させると竹の重さは乾燥前の半分程度になるという。

注文を受けたら、そのサイズに合わせて乾燥させておいた竹を選び出し、「ジグ」と呼ばれる専用器具を使って

フレームの形に組み上げる。その際、竹と竹のつなぎ目にはアルミ製部品を組み合わせ、その精度と強度を高める工夫を凝らす。

そして接合部分をエポキシ樹脂に浸したサイザル麻できつく巻き固めて固定する。この間にも、乾燥させて固める必要があるなど工程の合間に“待ち”の時間を挟むため、組み立てだけでも1カ月前後掛かってしまうという。

その後、フレームの形ができ上がったら、6種類のヤスリを使って何度も磨き上げ、フレーム全体に耐水・耐候性の高いポリウレタン樹脂で表面を覆う。これを乾燥させれば完成だ。

1台ぶんを作るだけでもこれだけの長い時間と多くの労力が掛けられている。つまり、それだけ多くの雇用を生み出す可能性があるというわけだ。

日本で100台以上販売

ザンバイクス・カンパニーはこの竹製自転車フレームを2011年に開発して以降、世界各国でこれまで延べ700台以上を販売。このうち、昨年1月に日本国内向けに取り扱い開始したアライアンス・ファクトリーは、日本向けにすでに100台余りを売り上げた。

国内では、主に全国各地のロードバイク専門店などを通じて販売している。取り扱い店舗は首都圏や近畿地方を中心に現在20店前後。山本社長は「当初は竹製の自転車というと、耐久性や強度について不安に思われることも少なくなかったのですが、ザンビア製の竹独特の厚みと強さを実際に見てもらうと、不安は消えるようです。最近では購入してくれたお客様がザンバイクスの竹製フレーム自転車で各地の



完成までに多くの労力が必要なので雇用創出効果も高い

ロードレースやヒルクライムなどに出場してくれることも増えましたので、『見かけだけでなく実際によく走る』といった評判も徐々に高まってきているようです」と話す。

フレーム単体の価格は税込み12万6,000円。これにサドルやフォーク、ギア、ハンドルといった部品を取り付け、完成形ロードバイクになると大体25万円前後になる。日本での顧客層は30代から60代まで、あまり偏りもなく幅広い年代に支持されているという。

マウンテンバイク向けフレームの取り扱いも始めた。「マウンテンバイクそのものは一時期のブームは過ぎましたが、一定のニーズがあります。以前から、マウンテンバイク向けフレームに対する要望も取り扱い店舗などから寄せられていました」と山本氏。今後でも取り扱い店舗の拡大を目指すなどして普及を一層進めたい考えだ。

日本国内でも地方を中心に自転車を使った町おこしが行われるなど、高級自転車に親しむ機会が増えた。健康管理やダイエット、格好良さなど実益面にも改めて目が向けられており、趣味を越えた乗り物としてサイクリングが定着しつつある。ザンビア経済にも貢献できる乗り物として、購入を一考してみては。自転車に関する問い合わせは同社（03-6459-2773）まで。